熟女トラックと
気弱デ〇チンショタ

うさぎロボ　著

一章　今時のガキってこんなにデカいの？

　アルミ加工工場。オーストラリアから運ばれてくるアルミの一つの終着点らしい。酒井は細かいことは知らない。下ろすのは板なので、港近くの工場でいったんそういう中間財に加工されているのかもしれない。

　板を加工しているのだろうと思える箱やパイプをつないだりする部品がトラックに載せられる。ここから再び本当の終着点に向かうのだ。

　トラックの横に立つ酒井。前に男が一人。

「女性のドライバーもいるんですね」

　担当の男。スラリとした体のスポーツマン風。二十少し。工員らしい青系の制服。

　年齢を値踏みすると、酒井はため息が出そうになる。

　――私の半分とは言わないけど、大まかには半分よねえ。

　酒井は四十少し。スウェット寄りのジャージ姿で、学生時代はちょっと荒れていたヤンキー系で今も金髪、年齢よりは若く見える。しかしたかが知れている。仮に目の前の担当に告白などすれば「ババア無理すんな」で終わりだろう。

　――まあほんとにそういうこと言ったら……**金ちゃんキック**だけどね。

　考えつつ、歯を見せる。

「やだ、まだ女扱いしてくれるんですね？」

「いや、はあ」

　――うわー、無茶切り返しにくいこというなこのオバチャン。マジでどう切り返せばいいんだ？　もちろん女扱いしますよ、って言ったら正解？　微妙だろ、だって「普通その年なら女扱いはされないけど」って前提がある発言にならないか？　かといって「いや、女扱いしません」じゃこれはこれで**ポリコレ的にどアウト**だしな。だから、曖昧に答えるしかない。

　へら、と**半端な笑顔**を見せつつ、タブレットを見る。

「えーっと、積み込みましたんで」

「了解でーす」

　頭を下げる。ゆさ、と揺れる肉塊。巨玉スイカ二つを胸に抱え込んでいるような爆乳熟女。

　思わず目を取られる若者。

　――うわ、相変わらずデカイ……。見た目もそこそこだし、エグイおばちゃんだよな。エロい。ジャージで茶髪という、元ヤン系熟女。エロに出てくる場合、幼い息子の友人のチン〇ン気軽にかわいがってくれそうな感じ。いいよな……

　腰を少しもぞもぞさせるスポーツマン。立ちそうだ。

　チラ、と一瞬股間を見る酒井。

　――ん、もしかして私のパイパイにビンビーン？　いや、違うわね。立ちそうならもっと大きく動くわ、子供じゃないんだから。

実際のところ、目の前の若者は立って一桁の**小指系男子**である。

当然、立っても大してポジションチェンジの苦労はない。

が、そんなことは知らない酒井は立っていないのだと判断してガッカリする。

――あーあ、若い子が反応してくれたら、ちょっと外に連れ出してバックリ咥え込んでやるのに。まあこんな若い子が私なんかに立つわけないか。旦那でさえご無沙汰なんだから。

酒井は自分がヤンキーなので、むしろ正反対の気弱な男と早く結婚した。良くある話だろう。

夫婦仲はよかったが、トラック運転手として酒井は家を空けることが多く、あまり夜の生活がないのが基本になってしまった。そのまま年齢を重ね、夫の性欲も衰えてくるのに合わせてほぼほぼセックスレス状態。

仲自体はいいのだが、満たされないことも事実。

挨拶して、多少腰を引いて離れていくスポーツマン。並みの大きさで立ちかけなら熟女の目を誤魔化すのは不可能だが、小指系男子なら何とか気づかれない。いや、同年輩なら酒井も気づくだろうが、二十近く年下では「立つわけない」と先入観がある。

トラックに乗ろうとする。

「酒井さん」

手を上げ、声をかけてくるのは同じ女性ドライバー。

二三歳下で、ギリギリ三十代かも、というぐらいの年。

茶髪で派手な豹柄のへそ出しルック、酒井ほどではないがかなりのスイカップの谷間はこれ見よがしに剥き出し。肉のたるんできた二の腕も太ももも剥き出し。

純粋に格好だけを見れば水商売系で――豹柄は多少引っかかるが――若い女性がやればモテファッションだろう。

だが四十近いとなると意味合いが変わってくる。

――会うたびに思うけど無理してるわよねえ。

元モテファッション、現**ババア無理すんなファッション**。

モテ女がそのまま熟女になってしまった、無理すんな系熟女といえる。

落ち着いた感じにすれば美魔女路線を狙えるのに、あくまでも若い女の枠に留まろうとしてまさに無理をしている。

「甘利さん、久しぶり」

女性ドライバーも結構いるとはいえ全体からみると珍しいし、同じぐらいの年で似たような所を走るとなるとさらに少ない。

となれば、なんとなくつるむ。工場にいるわけにもいかないので、とりあえず一旦トラックに乗って外に出て、近くの喫茶店に入る。

酒井はメロンソーダ、甘利はコーヒー。

「甘利さん、相変わらずオッパイ凄いねえ」

「やだあ、セクハラ！　男の人なら……あは、キーンですよ？」

「あら、甘利さんもやるんだ？　うふふ、昔はよく蹴ったもんよ」

「ああ、元ヤンでしたよね」

「そうそう。同じヤンキーの男ども、レディースなら簡単にやらせると思ってなれなれしくしてくるから、結構蹴り上げてやったわ。一日二つとしたら、何個かなあ。**延べ二千個**行ってるかも」

「きゃはは、蹴り過ぎ！　私は実際にはそんなに蹴ってないんですよ。護身術習ってるだけで」

「護身術？」

「女性向け護身術です。女一人でトラック運転手だと、日本が治安いいとはいえ、何かあるかもだから、会社に入った時点で習い始めたんですよ、先輩女性に薦められて」

「どういう技習うの？」

「ええ？　やだあ」

　肩をすくめ、周りをちらりと見る甘利。

　後ろから通り過ぎていく若い男。後ろから見れば爆乳でモテファッションに見えなくもない。二の腕のたるみなどに気づかなければ。

　期待して横を通り、顔を見て露骨にがっかりする。

　横目で、がっかりされたことに気づく甘利。

　――あ、このガキ。なーにがっかりしてんだよ。お姉さんのテクニック見せたろか？　未熟なおニンニン十秒でいかせたろか？　もしくはお仕置にタマタマキックかな？

　一瞬のすれ違いでも、いろいろある。

　実際に、咥えにもいかないし蹴り上げもしない。

「技はいろいろですけど、狙う場所は一択なんですよ。実はここだけの話……」

「ここだけの話？」

「男の人には、そこを狙えば女の子でも一発の秘密の弱点があるんです。うふふ、特別にお教えしましょうか？」

「っていうか、その部分についてさっきから話してた気もするけど」

「きゃはは、そうそう、金の玉です。ゴールド！　この店にいる男の人たちも全員が、二個ずつお股にぶら下げてる大事なモノ狙うんです」

「なるほど、その練習か。そりゃ効果的でしょうね」

「うふふ、浮気されたり、別れようって言ってきた彼氏くんたちみーんな、それでノックアウトしてきたんです」

「あは、そりゃかわいそうに」

　――っていうか、浮気はいいとして「別れ話」で金蹴りって理不尽じゃね？

　メロンソーダを吸い込む。

　ストローは植物由来らしい。死ぬほどどうでもいい話だが。

「でも、本当にそこばっかり？」

「そこばっかりです！　あ、目ん玉も狙いますけど」

「目ん玉って……」

「四つのボールを集中攻撃、これでどんなに強い男の人にでも勝てるんですよ。軽く目に手をこすらせて、目をつぶったところを**玉を潰す**。今はナノメカ入りの薬で玉ぐらい簡単に治るから、ガチ潰しオッケーなんですよ」

「男って大変だよねえ。女を一発でノックアウトは結構大変なのに、男だといくら鍛えてても玉狙われたら、華奢な女どころか、女児にでも玉蹴りＫＯくらいかねない」

「キーン、一発」

　楽しげな熟女二人に、周りの女性たちは笑いを堪える。

「ちょっとあのお姉さまたち」

「容赦ねー！　ボール集中攻撃！」

「私も、彼氏がなんかしたら玉けろっと」

　女子校生たちがクスクス笑いつつ、熟女ではなく、同じクラスの男子を見る。一緒に来たわけではないが、同じ店にいる。

　顔を赤らめ、うつむいていた。男たちはみな、そんな感じで不思議な羞恥と劣等感を感じ、居心地が悪そうだ。

「な、なんだよあのおばちゃんたち」

「でっかいオッパイしやがって」

「玉狙われたって、当たらなきゃ意味ねえ。女なんかに負けるかよ」

　口では勇ましいが、男子らの足の間、狙われる部分はキュンキュンに縮み上がっていた。

　女に自分を狙われた場合、同じ反撃が不可能であるため一方的にやられるとはっきり理解しているかのように。

　と、男女が目を合わせる。

「あ」

「はい、どうも」

　手を振る女子たち。普段ならお互い関わりあおうとしない、特に親しくないクラスメイトなど距離感の取り方が面倒である。

　しかし今は、女子らが満面の笑みで近づいてくる。

「奇遇だね」

「なんか顔赤いぞ」

「恥ずかしくなる話、お姉さんたちがしてたかな？」

「う、うるせえ。黙ってろよ、女のくせに」

「あ」

「言ってしまいましたなあ」

　普段ならキレる場面。しかし女子たちは余裕があった。

　にんまり笑い、椅子に座った男たちの耳元にしゃがんで口を近づける。

「女のくせに、なんて差別発言しちゃうなんて余裕あるねえ」

「な、なにが悪いんだよ」

「悪くないけど……あは、私たちが怒って、喧嘩になっちゃったら大変よ？」

　言われて、女子の方を向く男子たち。

　そのまえで、女子が膝を開き、スカートの前をパンと叩く。

「あっ」

　自分の身に移し替えて想像し、思わず膝を締める男子たち。

　机の下のその動きを察して、にんまり笑う女子たち。

「私たち……あんたらのここばっかり狙うからね」

「そうそう、ここばっかりねえ」

　パンパン、女子たちは平然と自分たちの女の部分を叩く。同じように男の部分を叩けないだろうと

見下すために。

――ほらほら、どう？　股間叩きパンパーン、あんたら男には無理でしょ？　やれるってんならやってみなさいよ。大事なタマタマを叩ける？　無理でしょうねえ。股間の強さなら、女のほうが超格上。か・く・う・え。

立っている女子たち。椅子に座った男子らを見下ろすが、形だけではなく内面的にも大いに見下していた。

顔を赤らめ、唇を噛む男子たち。

「ひ、卑怯だぞ」

「卑怯じゃないわよ。女の子は弱いんだもん。強い強ーい男の子と戦うなら、弱い弱ーいタマタマを狙うのは当然」

「そうそう。大丈夫よ、ナノ薬持ってるから」

「タマタマ潰れてもすぐ治してあげるからね」

笑う女子たち。聞いている周りの男たちが顔を赤らめ、急所の弱さを噛み締めながら膝を締める。

女たちは、つられて笑う。

熟女二人もだ。笑いながら店を出ようと歩き出す。

「いや、女は強いわね」

「というより、男の一部分が弱すぎるんですよね」

「わかるわかる。どんな最強ヤンキーだろうが、コリっとタマタマがこうね、私の足の甲でコリっといったらもう敗北、完敗。クソデカバイクにはねられても「うおおおお！」って感じの**根性あり過ぎ男子**でも女の子に玉蹴り食らったら「許して！」って顔になっちゃう。本当に男って……かわいいわよねえ」

「かわいい！　それですよ！　やっぱり完璧であるより、どこか欠けてるほうがいい」

「欠けてるというか……出っ張ってるんですけどね」

手を叩いて笑う熟女二人。揺れる爆乳。若ければ人前では恥じらいもあるが、初体験から二十年以上という熟練兵に怖いモノはない。

と、酒井の目に一人の少年が映る。十歳いかないぐらいの、気弱そうな子。トイレの前でうろうろしている。

「ん……お前、どうした？　何か困ってるの？」

「あ、ノータイムで……流石元ヤンはフットワーク軽い」

甘利が感心する。

彼女も少年に話しかける。

振り返り、ギョッとする少年。

――うわ、すっごく……オッパイ大きいおばちゃんたち。

顔を赤らめる。

甘利が頬を緩める。

――ま、オッパイ見ちゃって。かわいいわねえ。ショタっ子大好き甘利お姉ちゃんとしては、この子もパックリ行きたいわね。おティンティンをおマンマンで。

甘利の邪悪そのものの考えなど知らず、しゃがむ酒井。

目の前に爆乳が押し出されてきて、目のやり場に困る少年。

「そ、その、おしっこに……」

「あら、それならこっちね」

　既婚子持ちである。自分が男なら不審者扱いを恐れる必要があるが、女なら問題ない。

　男子トイレにはいり、小便器の前に立たせる。

「もちろん、男は立っておしっこよね」

「う、うん」

「偉いぞ、男の子はそうでなくっちゃ。コレ、付いてるんだもんね」

　少年の股間でマイクでも握る手つき。

　顔を真っ赤にする少年。

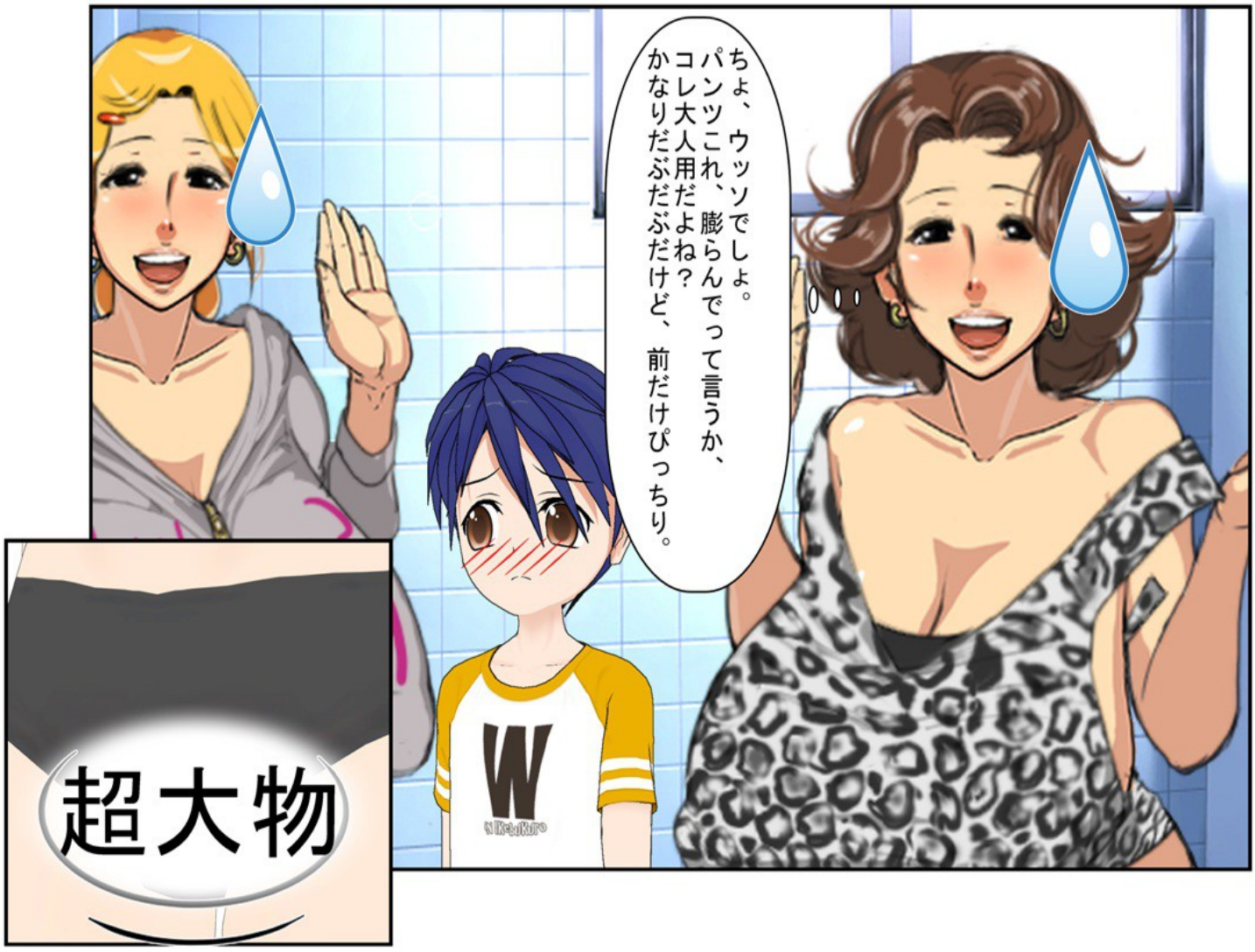
「それじゃ、しちゃおうか」

　ズボンを下ろす。

　下ろして思わず目を点にする。

「あっ」

　――ちょ、ウッソでしょ。パンツこれ、膨らんでって言うか、コレ大人用だよね？　かなりだぶだぶだけど、前だけぴっちり。



チラ、と少年を挟んで反対側の甘利を見る。

彼女も目を点にしていた。

「ヤダこれ……スッゴイ詰まってる」

「や、あ。それじゃ、出すよ？　おチン〇ン……」

パンツを下す。

ブルン、と肉バットが垂れ下がる。当然のように剥きだされた先端は少年の拳より大きい位でエラの張った三角形。柱も長く太く、萎えていても太い血管が浮いている。無毛だが、垂れ下がる肉玉も鶏卵サイズで、男性器だけで体重三割増しぐらいになっているのではないかと思えるほどの異様な発達具合だった。

「ひっ」

「うほ」

顔を赤らめる熟女二人。目を剥き、ごくりと唾を飲む。

彼女らの豊富な経験の中で、目の前の物以上のは何本も見てきた。

というか、酒井の夫は平時三〇センチ越えである。目の前のものは二〇センチ程度で、数段劣る。劣るが、年齢的にこれは異常に大きい。

震える手で、巨棒を下から持ち上げるようにして位置を固定する。

――う、嘘だろ。大きい。いや、あの人のほうが大きいけど。でも、この子若いし。というか、子供なのに……年齢的に、超巨根……いや、大人としてもゆるゆるでこれって超巨根じゃん。

じっと見てくる爆乳熟女二人に、胸が高鳴る少年高垣。

――わ、見てる、見てる、僕のチン〇ンを女の人二人が。ああ、タマタマまで。みんな見るんだ、クラスの女の子たちもそうだもん。いっつも何かあるとすぐ脱がして、高垣のお化けチ〇ポって……チン〇ンみんなして引っ張って、逆らうと玉にデコピン。ずるいよ、女の子は。自分についてないから、引っ張られないしデコピンもされない、一方的に。痛いし恥ずかしいし……ずるい。でも、このおばちゃんたちは、なんか、違う。オモチャみたいに見てるんじゃなくて……何かこう「いい物」見て、喜んでるって言うか……

巨根を女児たちにおもちゃにされる日々を思い出し、屈辱に玉がわずかに引きあがる。彼は気づかない、大人の女二人のほうが、使い方も知らない女児たちよりよほどおもちゃとして彼の男性器を見ていることなど。

大きく息を吸う。トイレの消臭剤の臭い。胸の高鳴りがドクンドクンと耳に聞こえる。と、背中に大人の女の手。甘利。

「ね、ここじゃ男の人が来ちゃうかもだから、個室に行ってくれたら、お姉さんたち助かるんだけど……」

「あ、わかりました」

前を出したまま動く。ブルブルと巨棒が揺れる。

「あ、あは、大きいな、お前」

「そ、そうですか？」

「でっかいぞ。胸張れよ。デ・カ・チ・ンくーん」

「あう」

ぴく、と巨棒が揺れる。

――うんうん、やっぱりチン〇ン褒められて喜ばない男はいないね。

思いつつ、個室の戸を閉める。三人入ると多少は狭い。

狭さを口実に、密着できる。

「狭いから、ちょっと私に引っ付いて。お姉さん気にしないから、ほら」

「あっ」

「チン〇ンはお姉さんが持ってやるから、ほら。こーんな大きいの、お前大変だろ？」

「ああっ」

薄い布に包まれた爆乳に頭を抱き締められ、一方で巨棒をむんずと握られ、空いた手で巨玉まで持ち上げられて体をこわばらせる。

特に一部が強張りそうになるが、我慢していたので先に尿が出る。

「おほ、出る出る。っていうか、お前キ〇タマも立派じゃん」

「え、そんな……」

「そんなってなんだよ」

「女の人が、き、キ〇タマなんて……」

カア、っとさらに顔を赤らめる。

「あは、かわいい」

　きゅん、と子宮がうずくのを感じる甘利。

　酒井はこれ見よがしに羞恥に歪む顔を作る。

「あ、やだ。恥ずかしい。キ〇タマって言っちゃった？　お姉さん、女の子として恥ずかしいよ。口にしちゃうなんて……あは、女の子なのに口にしちゃうなんて。キ〇タマ、って言っちゃうなんて」

　言いつつ、甘利の爆乳に埋もれた高垣の顔に近づき、耳に口づけせんばかりに密着、息を吹き付けながら連呼する。

「キ〇タマキ〇タマキ〇タマ、女の子なのに、キ〇タマって口にしちゃうなんて、キ〇タマキ〇タマキ〇タマキ〇タマ、キ〇タマー！」

「あっあっあっあっあっあっあっ」

　モミモミとそれを揉みながら、声を押さえて名前を連呼する酒井。

　ほとんど白目を剥く高垣。

　――ああ、だめだ、だめだ、なんか……あ、チン〇ンが、チン〇ンがっ……

　ぐぐい、と反り返る。

　経験豊富な熟女二人が、それでも目を見張って喜色を浮かべる。

「おっほおお！」

「大きいわ、大きいわああ！」

「おいおい、今時のガキってこんなデカいの？　私の同級生なんて大体ドリルだったぜ？」

　ドクンドクンと強力なポンプで膨らまされた肉バット。パンパンに張った先端部を見上げつつ、少年の弱点を優しく揉むのは止めない酒井。

　反り返る巨棒は、長さは二十五センチを超え、太さは女たちの細い手を凌駕した。血管のバキバキに浮いた長い茎に、女たちの目は雌の本能で釘付けだった。

体験版終わり

この後、紆余曲折を経て、徐々にショタに目覚めていく酒井。

続きは製品版でぜひお楽しみください。